◉ SEE（Sexuality Education&Empowerment）主催『えんたく en México』報告

# 性暴力を理解し、“対話”を通して関係性を開く

SEE（Sexuality Education & Empowerment）共同代表　野坂 祐子

## はじめに～ WAS 参加者による交流企画～

2019 年 10 月 13 日～ 15 日にメキシコシティで行われた第 24 回世界性の健康学会（World Association for Sexual Health）にて、日本からの参加者を対象としたプログラムを実施した。SEE（東優子・野坂祐子・吉田博美）による本企画は、参加者同士の交流とネットワーキングを目指したものであり、日本性教育協会の協賛を得ておこなわれた。

WAS には日本の諸団体も登録しており、隔年、世界各国で開催される大会は、性にまつわる最新の研究や実践等の情報共有の機会になっている。日頃、なかなか会えない日本の実践家との貴重な交流の場でもあるが、研究の内容だけ聞いているか、飲み会での顔しか知らないか、どちらかではないだろうか。せっかく日本全国から幅広い領域から参加されているのだし、何といっても「性」に対するこだわりがある方々である。どんな思いで活動に取り組んでいるのかお聴きし、それを次世代につないでいきたい。そう考えて、今回、SEE の活動の中心である大阪からメキシコに舞台を移してイベントを開催した。

本企画『えんたく en México』は、「関係性を開く」をテーマとし、前半は、藤岡淳子氏（大阪大学大学院教授）による「性暴力の理解と対応の基本」のミニレクチャー、後半では「えんたく」というリフレクティング・トークの手法を用いた“対話”のワークショップをおこなった。性問題行動や性暴力は、「関係性の病」(藤岡氏）と呼ばれるように、非対等で閉鎖的な関係性のなかで起こる。安全・安心を基盤とする性の健康を考えるうえで、関係性は欠かせない要素である。支援や研究に携わる実践家にとっても、関係性を開く機会が必要なのではないか。

そんな願いを込めて声をかけたところ、学会初日のタイトなスケジュールの合間に、20 名近くの参加者にお集まりいただいた。本稿では、その概要を報告する。

## 「性暴力の理解と対応の基本」

法務省において刑務所等の矯正施設で約 20 年間勤めたのち、現在は大学で教鞭をとりながら社会内で性加害者と家族等への支援を行っている藤岡氏に「性暴力の理解と対応の基本」をご講義いただいた。

藤岡淳子氏の講義

まず、性暴力とは何か。性的欲求は、自然で健康的なもので、性の好みも十人十色である。性暴力は、①同意なし、②対等性なし、③被害者に自発性なし、という条件をもつ。性暴力は、言葉によるものや覗き、下着盗といった非接触型から、レイプや快楽殺人など身体暴力性の高いものまでプリズムになっている。どれも上述した３つの条件にあてはまるが、それぞれの

リスクは異なる。

性暴力は、「関係性の病」といえる。性の部分に着目されがちだが、性行動を通じた「暴力」としての側面に留意する必要がある。性暴力とは、当人に欲求充足をもたらすパターン化された行動であり、「俺はこんなにがんばっているのに…」といった不満と「どうして俺ばっかり」という認知が、自己中心的な暴力行動につながる。この「感情－認知―行動の連結」のパターンに介入する必要があり、性暴力行動の変化にターゲットを絞ったアセスメントとトリートメントをおこなう。

子どもの場合は、「自分は性犯罪者」という否定的な自己概念を固定化させないように「性問題行動」と呼び、本児に対しても「性問題行動を持つ子ども」という表現を用いる。

## 犯行プロセスの理解「４つの壁」

性暴力は、「相手をたまたま見つけて、思わず襲ってしまった」というものではなく、そこに至るプロセスがある。図１は Finkelhor（1984）の４段階モデル（直線モデル）を説明したものである。

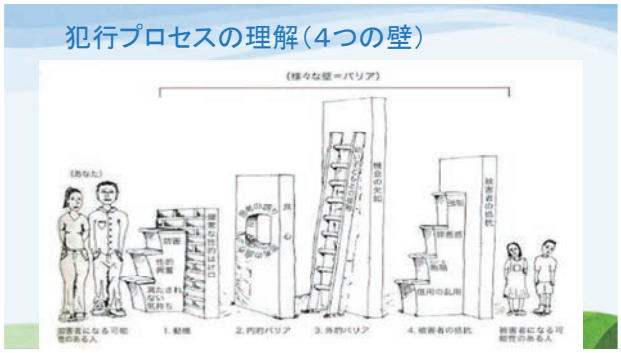


図１　『回復への道のり：パスウェイズ』
（カーン著、藤岡淳子訳，2009）より

①性加害行動の動機（OK ではない性的思考）
② OK ということにする（言い訳：内的バリアを超える）
③プランニング（被害者への近づき方を考える：外的バリアを超える）
④犯行（被害者の抵抗を抑圧する）
という４つの段階を踏んで性暴力は起こる。

人は満たされた生活を送っていればそれほど悪いことはしないが、頑張っても報われない、認められない、叱られてばかりといった状況があると動機の壁（①）を乗り越える一歩を進んでしまう。

気晴らしのマスターベーションの頻度が増え、頭の中は性的なことでいっぱいになる。そんなときに、またうまくいかないことがあると①を超えてしまう。「やってしまおうかな」と思っても、良心が内的バリア（②）になる。性犯罪者も良心はあるが、「盗撮がバレなければ相手も傷つかない」「相手も嫌がっていなかった」といった反社会的な考えや言い訳（思考の誤り）をしてしまう。それでも犯行の機会がなければできないが（③）、彼らはふだんから洗濯物やポストなどを物色しており、自分から機会をつくる。

最後は被害者の抵抗（④）が壁になるが、加害者の方がパワーが上なので、被害者の抵抗を容易に乗り越えてしまう。「新しいゲームがあるよ」などとわいろを渡したり、遊んであげたりする。

治療教育では、自分の犯行過程を思い出し、正直に話すのがポイントとなる。最初に「あなたが考えたことを知っているのはあなただけで、こちらはわからない」と説明する。性暴力は、医療にかかって服薬すれば治るようなものではなく、スポーツと同じように、本人が練習してスキルを身につけなければならず、支援者はそれをコーチするガイド役である。こうした関係作りが肝要である。

## 治療教育と同意のある関係性

治療教育では、４つの壁を高く、強くしていく。

まず、外的バリア（③）を高くして、再犯の機会を作らないように本人が自分でコントロールするとともに、家族とのコミュニケーションの質を高め、見守りによる双方の安心感を高める。次に、内的バリア（②）の思考の誤りを扱い、修正していく。思考の誤りには、被害者の同意を無視したり、「同意があった」という都合のよい解釈や誤解、ねつ造もある。

同意が成り立つには、次ページ図２に示すようなさまざまな条件が求められるが、加害者だけでなく、社会全体も同意の条件を理解できていないと思われることが少なくない。

治療教育で、被害者の壁（④）を高めるには、被害者の状況の理解が重要となる。被害者の反応や性暴力による影響について具体的に説明する。同意の理解と

同じように、社会でも被害者の状況が誤解されていると感じる。

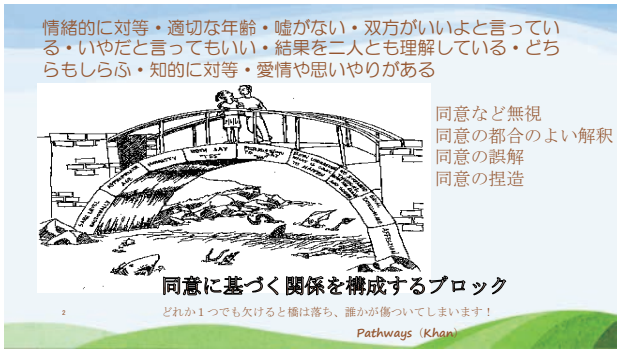


図２　『回復への道のり：パスウェイズ』
（カーン著、藤岡淳子訳，2009）より

そして、もっとも重要なのは動機のバリア（①）の強化である。まず、加害をした本人の境界線が守られ、安心・安全な生活環境をつくる必要がある。家庭のなかで彼らの境界線が守られていない。多くの場合、家族のコミュニケーションの量と質を高めることで、本人が正直に話せるようになっていく。

なぜ非行・犯罪をしたのかを理解し、変化（成長）への期待とのバランスをとる。そして、本人に必要なスキルの習得をサポートする。葛藤の体験とそれを乗り越える体験も大切である。

## えんたく

### なぜ、「えんたく」？

日本で開発された「えんたく」(アディクション円卓会議 ©ATA-net）は、ノルウェーのトム・アンデルセンの家族療法によるリフレクティング・トークから発展したもので、多様な声を響かせる工夫がなされた対話の手法である。

なぜ、“対話”が必要なのか。非行や犯罪をする人は、コミュニケーションが悪く、孤立し、断絶している。そこから回復するには、人とのつながりが不可欠である。できるだけ対等な関係のなかで、一人ひとりの声が響き合い、そこから自分の意見を作っていけるような対話が求められる。「えんたく」は、そんな場を作る試みであり、多くの声を響かせるために交通整理をするような方法である。

対話は開かれたものである。対等性のなかでお互いに応じ合いながら意味が生成され、変化していく。多声的（ポリフォニック）な対話になるにつれ、新たな理解が生じる可能性が広がる。全ての声が重要で、それらは等しく価値がある。モノローグにはどちらがいいとか正しいというヒエラルキーがあるが、対話はともに考える手段である。困難で行きづまった状況でこそ対話が必要とされる。結論を出すことを目指していないのが特徴であり、対話のなかから自分の考えを見つけてほしい。

### 内的会話（考える）と外的会話（表現する）

トム・アンデルセンのリフレクティング・トークのイメージ（図３）では、対話の片方が発したことが、本人の耳から入り、内的対話を深めていく。同時に、それが相手にも届き、相手のなかに入っていく。そして、双方が新たな意味を考えていく。リフレクティング・トークで相手の話を聴いている間、内的会話が活発になり、考えることに専念できる。内的会話と言葉で伝える外的会話を切り離すのである。

ふつうの会話では、相手の話を聞いているようでいながら、自分が次に話すことを考えているものだ。じっくり聴いて、しっかり応答することで、新たな意味が生まれ、協働で理解が深められていく。

図３ トム・アンデルセンによる「リフレクティング・トークイメージ」

### 「えんたく」の実際

後半の「えんたく」では、藤岡氏とともに一般社団法人もふもふネットで性暴力への取り組みをしている毛利真弓、坂東希の両氏が進行役を務め、”対話“が進められた。

「私が性への取り組みをするわけ」というテーマで、会場から６人が自発的に参加され、若い世代の３人と進行役、キャリアのある３人と進行役という、２つの「内円」が作られた。他の参加者は、内円を囲むか

たちの「外円」で話を聴く。内円の参加者は、進行役と会話するようにテーマについて語る。一人ずつ順に話したあと、もう一巡する。その後、もう一つの内円の参加者が、同じやり方で語る。２つの内円が二巡ずつ話し終えたら、「外円」の参加者が自由に発言する。最後に、全員で感想を共有する。

左から、進行役の坂東氏・藤岡氏・毛利氏

進行役は、リフレクティング（照らし返し）を行うため、発話者は、自分が言ったことを再度、自分で考えながら、「今、思うこと」を言葉にする。何を言ったらよいかわからない様子も見られたし、他者の話に影響を受けて話題が進展していく場面もあった。

数分ずつの順番（ターン）で話されるので、その方の人生や経験のほんの一端に触れられるだけだが、それぞれの家庭状況や時代背景、活動の原動力、未来に望むことなど、さまざまな語りを聴くことができた。聴いていた外円の参加者からも次々に「今、思うこと」が語られた。参加者同士、初めて会う人もいるなかで自分の思いや個人的な体験を共有するのは、なかなか難しいものである。「多くの声を響かせる工夫」という「えんたく」の技法による成果と言えよう。

「えんたく」実施風景

## おわりに～"対話"をつなぐ～

「えんたく」の説明にもあったように、「えんたく」では結論が出されることがない。いわば「オチがない」状態に、大阪人ならずとも腑に落ちないところもあるかもしれない。でも、この「すぐに落ちない感じ」がよいのではないか……と個人的には感じられた。

性にまつわる現場では、「正しい情報」や「望ましいありかた」をいかに教えるべきか、「有害な情報」と「危険」をいかに回避させるかといった善悪の二項対立が前提になりやすい。もちろん正しい情報や危険の回避は重要であるが、「えんたく」では、だれもが性に対して悩み、傷つき、怒り、楽しみ、葛藤し、闘い、そして変化していく姿が語られた。性を生きる姿は、人それぞれで正解もない。この結論がない状態こそが性のリアリティであり、すぐに腑に落ちないくらいがちょうどよいのかもしれない。

他者の体験に耳を傾けると、自分の思いがけない記憶が呼び起こされる。とはいえ、話し手がどんどん変わるので、自分のことばかり考えてもいられない。これも、浅く広く安全に"対話"を進める工夫なのではないか。限られた時間であったにもかかわらず、たくさんの方の人生や思いに触れられた。ぜひ、この"対話"を今後につないでいけたらと思う。

ワークショップでは、参加者全員が「外円」から発言され、「内円」での対話にも挑戦いただいた。参加された皆さまに改めてお礼をお伝えするとともに、講師と進行役の方々にも感謝申し上げる。

SEE 性教育アカデミーは、「関西性教育研修セミナー」として各種講演・海外スタディツアーを企画してきた 10 年の実績を活かし、より系統だった性教育の学びの場を提供していくことを目的として開講されました。

SEE がモデルとするのは、ユネスコなど国連諸機関や国際学会が推奨する「包括的なセクシュアリティ教育」(CSE) です。学校や地域社会でこれから性教育をしていきたい、あるいは立場上しなければならなくなったという初学者はもちろんのこと、実践経験者にとっても CSE の基盤となる価値（人権・多様性尊重など）について学び直し、役立つプログラムを提供します。

次回のセミナーは、2020 年 3 月 8 日（日曜日）に「大阪府立大学 I-Site なんば」で開催される予定です。